

48年度の補導の状況

学年別	小学校生	中学生	高校生	大学生	各種学校生	職業少年	無職少年	計
行方不明							1	
凶器所持		1					3	
家出	3						3	
怠学	14	31	156				201	
怠業						7	7	
金銭らん費	30	2					32	
金品持出し	2						2	
不純異性交遊		6	4	1			11	
喫煙	2	73	9	11	88	24	207	
不良交遊	3	3					6	
盛り場はいかい	50	35					85	
不健全な娛樂	5	17	51			9	2	84
夜遊び	2	2				1	5	
その他	77	100	20				197	
シンナー乱用			1			5	6	
法にふれる行為	18	5	4			3	30	
計	201	196	316	13	12	113	26	877

青少年の非行が倍増

昭和四十八年度に市の少年補導センターが補導した小中高校生は、七百十一人にのぼりました。これは四十七年度の三百六十五人の約二倍の急上昇ぶり。補導で最近特に目立つのが、盛り場での非行です。年代層も次第に小学校低学年へと移行する低年齢化の傾向にあり、また、集團化の非行が多くなっています。こうした傾向は、新しい遊び場の出現といった社会環境の変化の中で微妙に揺れ動く青少年のき弱な心理状態の一面向を如実に示しています。今号では、補導状況を通してみた青少年の非行の傾向と原因、さらに家庭のあり方などをみてみました。



青少年が健やかに成長するよう活躍する街頭補導員

新しい盛り場出現で

低年齢集団化へ

実態

市の少年補導センターが補導した年代別の内訳では、一番多いのが、高校生の三百十六人で全体の約四十四%。次いで小学生の二百九十六人、約二十九%。中学生の百九十六人、約二十七%の順になっています。

非行の傾向も「盛り場のはいかい」から「怠学」「喫煙」へと移行するのがポピュラーな例。具体的に世代別でみると、小学生では、大型店舗の進出によって、補導される場所もこうした盛り場に集中しています。補導例では、ゲーム場での金銭乱費、目的もなしに店内をぶらつく子、ゲーム代はおもちゃや売場でおそくまで遊んでいる子、など多種多様です。この

ように家からお金を持ち出す子、

環境が一変したための一時的な現象とはいうものの、初期の行動から引きなどの行為をした小学生は十八人。この数字以外に実際にかなりの増加が予想されています。

こうした心理状態について、補導員の話を総合すると、「最初は出来心からそれがスリルと興味を伴ってエスカレートし、補導された時は罪の意識もない態度になっていた」として、家庭教育的重要性を指摘しています。

中学生では、怠学や盛り場のはいかいが自立ち、それも計画的、集団化の様相を呈しています。

高校生では、圧倒的に「怠学」が多く、補導件数の約半数を占めています。

中学生では、怠学や盛り場のはいかいが自立ち、それも計画的、集団化の様相を呈しています。

高校生では、圧倒的に「怠学」が多く、補導件数の約半数を占めています。

中学生では、怠学や盛り場のはいかいが自立ち、それも計画的、集団化の様相を呈しています。

高校生では、圧倒的に「怠学」多く、補導件数の約半数を占めています。

